高齢化と後継者不足
漁業のこれから

夏の午後は市場が最も活気づく時間。水揚げされたばかりの海産物が所狭しと並び、そこで行われる競りでは、漁業従事者たちのエネルギーを感じることができます。

ですが、その賑やかさの裏側で悩みも抱えています。それは漁業者の高齢化と後継者不足です。

収入の不安定さや仕事の過酷さなどのイメージから漁師を志す若者が減っているのです。しかし、これは何もにかほ市だけに限ったことではありません。

漁業に携わっている人を対象に行われる漁業センサスによると、昭和38年調査では県内に3、992人いた漁業就業者の数は、現在その3分の1で1、263人にまで減少しました。また、60歳以上の漁業就業者が約50％以上を占めるなど、後継者不足と高齢化に歯止めがかからない形です。

そんな中、明るい話題もあります。象潟支所管内でこの1年間に5人の若者が漁師の仲間入りを果たしたのです。

その新人漁師たちに仕事の話を聞いてみると、共通して「漁業はやりがいがあり、素晴らしい仕事だ」と皆笑顔で話してくれました。

その真っ直ぐな視線の先には、未来という大海原が見えているのでしょう。

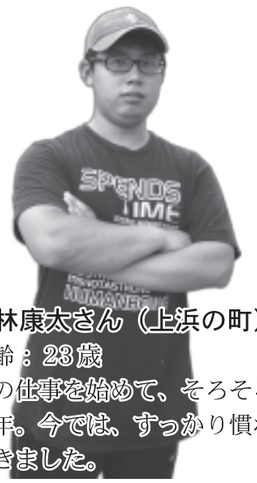
その漁業の明日を担う新人漁師を以下で紹介します。

秋田県における漁業就業者数の推移

調査年	漁業就業者数	60歳以上の割合
昭和38年	3,992人	13.3％
昭和53年	3,736人	14.7％
平成　5年	1,786人	38.5％
平成20年	1,263人	58.3％

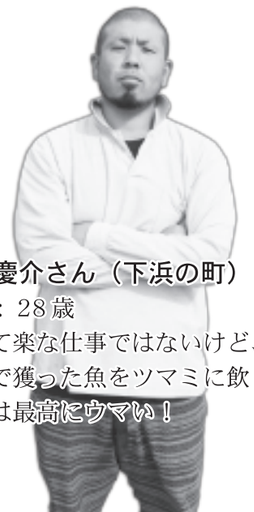
※出典：漁業センサス

漁業の明日を担う5人の男たち



小林康太さん（上浜の町）
年齢：23歳
この仕事を始めて、そろそろ1年。今では、すっかり慣れてきました。

佐々木一成さん（下浜の町）
年齢：24歳
小さな時から漁師は憧れの職業でした。新しい仕事を覚える度に喜びを感じています。



齊藤慶介さん（下浜の町）
年齢：28歳
決して楽な仕事ではないけど、自分で獲った魚をツマミに飲む酒は最高にウマい！

佐々木一彦さん（下荒屋）
年齢：38歳
漁師の世界は厳しくもあるけど、先輩方から様々なことを勉強させてもらえる最高の職場です。

柴田佳さん（30区）
年齢：28歳
仕事を頑張った分だけ、多くの水揚げが見込めるところに魅力を感じています。

行政の取り組み
つくり育てる漁業

にかほ市では、つくり育てる漁業を推進しています。主な取り組みとしては、ハタハタの産卵場となる藻場の造成やアワビの稚貝放流を行い資源の保全に取り組んでいます。

また、安心して漁業を営める体制を支援するため漁業経営安定資金貸付制度も同時に行っています。

さらに、海洋環境への意識高揚を目的に市内小学生を対象としたサケの稚魚放流体験事業なども行っています。

サケの稚魚放流の様子

市内団体の取り組み
森が海を育てる

「鳥海山にブナを植える会」は、鳥海山にブナの森を復元させる事を目的に活動しており、平成6年の設立以来約3万本以上ものブナを植樹しています。

この活動が結果として、豊かな土壌を作り、栄養分豊富な水を海に届け、にかほ市近海のプランクトンや海藻を育むことに繋がってきます。

にかほ市の新鮮で美味しい海産物は、森が育てているといっても過言ではないのです。

美しい森は、きれいな海を作る

漁業協同組合の取り組み
漁業の振興に向けて

秋田県漁業協同組合では、海の清掃活動やイワガキやアワビなどの密漁を防止するためにパトロールを実施しています。

また、日本海で獲れる海の幸の美味しさを市民などに広く知ってもらい、魚の需要を高めるため、漁業組合の有志などが中心となり「きさかた「港」海の幸まつり」を開催しています。

8月27日、道の駅象潟「ねむの丘」を会場に開催された第17回きさかた「港」海の幸まつりでは、新鮮な海産物を求めて県内外から多くの方が訪れました。

会場には、購入した魚貝をその場で焼いて食べることができる炉端焼きコーナーが設置され、用意した40セットは、30分程で完売。

このイベントでは、イワガキ1、000個、アワビ300個が2時間程で完売するなどの盛況ぶりでした。

海と共に生きる、そのために

人は打ち寄せる波に思いを馳せる。海岸に打ち寄せる波は変わらないものの象徴としての永遠を連想させる。それは小説や歌謡曲の歌詞をみても明らかだ。

しかし、海の中に目を向けてみると、変化に富み多様な生物が多様な生命を育んでいることに驚く。まさに母なる海である。

最近、その母なる海が弱っていることはご存じだろうか。海藻が死滅・激減し、それに伴いイワガキやアワビといった水棲生物が減少する「磯焼け」と呼ばれる現象が起きているのだ。そして、その主な原因は詳しくわかっていない。

「親孝行したい時には親はなし」といったことにならないように私たちは行動を起こさなければならない時期に来ている。

その行動を起こしている団体の一つに上記で紹介した「鳥海山にブナを植える会」などがある。森を育てることにより、栄養分が豊富な水が海に注ぎ、イワガキを始めとした資源を育てるのだ。

「森は海の恋人」という有名な言葉があるように、鳥海山と日本海は切っても切れない関係にあることがわかる。

磯焼けで失われた環境が回復するまでには、きっと多くの時間を要することだろう。

海という大切な宝を、美しいまま未来へ引き継いでいくため、今一度海を見つめ直し、海に感謝して暮らして行きたい。